THE KYOTO UNIVERSITY MUSEUM

Newsletter No. 46

August 2019

京都大学総合博物館
ニュースレター



「タイムライン　―時間に触れるためのいくつかの方法」展示風景（2頁に関連記事）

2019 年度企画展紹介
　タイムライン　―時間に触れるためのいくつかの方法 2
新館長からのご挨拶 4
2019 年「青空子ども博物館 in 円山」の開催 5
「出張子ども博物館 in 台湾」を終えて 5
洛北高等学校・附属中学校との連携事業について 6
招へい研究員の紹介 7
総合博物館コレクション研究〈6〉
　海角遺珠　記憶拼図　（遠く忘れられた文化財 記憶のパズル） 8
研究資源アーカイブ通信〈16〉
　アーカイブズの整理技法に関するノート①―容器リストと索引 10
総合博物館日誌（2019 年 3 月～ 6 月） 12

2019 年度　企画展紹介

タイムライン　―時間に触れるためのいくつかの方法

TIMELINE—Multiple measures to *touch* time

開催期間：2019 年 4 月 24 日（水）～ 6 月 23 日（日）

本展は，「私たちは作品をいかに形にし，残すのか」という問いに立ち向かうなかで，近現代美術の織りなす時間軸―タイムライン―の在り方を，作品の組成や経年変化，保存修復，アーカイヴなど，複数の視座から浮き彫りにすることを目指した企画である（表紙）。

近現代になって美術の世界に訪れた素材と技法の多様化は，芸術作品の生をありとあらゆる形に変容させてきた。当然のことながら，個々の素材は異なるスピードで変化を続け，部分的な変形やある種の破損，消滅，果てには，博物館・美術館などの空間内での一時的な「個体の死」をも経験しながら，現在に至る。こうした現状を踏まえた上で，今日のミュージアム内外では，現代美術に使用される多様な素材についての検討や，経年変化の様相の理解と保存へむけた対策が早急に求められている。本展のねらいの一軸は，こうした緊急の課題を見据えた上で，作家，修復家，美術史家，インストーラー，学芸員など，いわば「美術作品に関わるありとあらゆる人々」が集結し，対話と調査を通じてひとつの展覧会を立ち上げること，そして，現代美術の保存とアーカイヴ研究のために具体的に何ができるのかを展示企画を通じて思考することにあった。そのような意味で，タイムライン展は，現代美術の一展覧会でありながら，同時に，展示された作品やひいては空間そのものの保存や記録のケーススタディとしての機能を託された催しであり，一つのささやかな提案でもあったと総括することができる。

会場は，京都の造形作家井田照一の活動場所，イダショウイチスタジオでの調査時の記録映像から始まり，井田照一《タントラ》へ，そしてその奥へと歩みが導かれる構成となっている。

井田は，昆虫の死骸や，病魔に冒された自らの体液を作品に埋め込み，経年変化の果てに腐敗する素材と，死に向かう自らの肉体を切り結び制作を行った。本展では，没年まで井田が制作し続けた 402 点の連作《タントラ》（豊田市美術館収蔵）のうち 27 点と，作家の元に残されていた未公開の《タントラ》7 点を，表裏同時に鑑賞可能な形で公開した。なお，後者は，作家本人が設計したオリジナルの額におさめた。同時に展示された光学写真や作品素材は，《タントラ》の物理的な構造や経年変化の諸相を示し，「作品の生」の再考を促す役割を担っている（図 1，2）。

井田作品から会場内へ進む路，異なる職能を持つ 7 名の作家が集合したアーティストユニット，ミルク倉庫＋ココナッツの作品《それらはしっかりと結ばれていて，さらに離れたキャビネットに閉じ込められています―それでも，物は動かされ，音楽は演奏されます。》が出現する。「ショウジョウバエと遅延線記憶装置」「海老天とタジン鍋」のように，2 つの事物が台座の上に併置され，背景の壁には，事物内に見いだしうる時間の様相の図解＝ダイアグラムが付された。「現象の伸縮」「履歴の中抜き」などのダイアグラム上の 5 つの「時間名」は，変幻自在で非直線的な時の在り方，あるいはその不確かさを鑑賞者に示し，本展のタイトル「タイムライン」の語に付随する直線的なイメージをかき乱していく（図 3）。



図1　展示風景



図2　展示風景



図3　展示風景

続く大野綾子の作品エリアは彫刻《さかなとして暮らす》をはじめとする 4 点の作品群によって構成される。通常，強固なもの，と考えられている石を素材としながら，大野は，石の移動にともなう破損やそこに潜むある種の「脆さ」に対峙してきた。本展では，長い時間をかけ削りだされた石彫が編む長期的な時間と，短期的な展示設営の時間，あるいは博物館常設展が提示する悠久の時間がオーバーラップするなかに，大野作品の複合的な時間軸が捉えなおされている。なお，作品横の壁面には，彫刻内部の結晶の組成を，偏光顕微鏡で撮影し公開した。

外部からの採光が特徴的なエリアには，土方大の作品《Artificial Garden》が広がる。尿素や人造石からなる土方の作品は，会期を通じて成長し，やがて崩壊へ向かう。展示開始時と終了時では全く異なる外観を呈する《Artificial Garden》は，おそらく展示作品のなかでは最も「可変性」を印象付けるものであり，現代美術保存の課題を体現するものにも映るだろう。この素材選択は，自然に還っていくものを素材とする，という作家の意思による。短命の生を目に見えない「遅さ」で駆け抜けることで，私たちが生きる生の速度を浮き彫りにする力を有す土方作品の制作過程については，実験段階から記録が採取されている。

展示最終章には《To Paint #02》《「To Paint #02》を記述する」》をはじめとする，加藤巧の 7 作品が展示された。様々な素材から成る複合的なモノとしての絵画の在り方について思考し続けてきた加藤巧は，今回，絵画とその光学写真を併置する試みを行っている。作品と同寸の紫外線写真や斜光写真は，作品本体であり，そのドキュメンテーションであり，同時に作品構造をつまびらかにするための記述として，二重三重の機能を果たす。作品内部にある種組み込まれながらもその組成を提示する加藤作品のドキュメンテーションの在り方は，井田作品の裏面に作家の手で詳細に記述されている「木灰，体液，口紅，青汁――」といった素材名の生々しい羅列と呼応しあい，改めて私たちに，「いかなる素材からなるものであれ，『モノ』として常時変化し続けている」存在としての現代美術の実態を想起させる。

本展覧会の趣旨，すなわち「様々な分野の人間が協同する場を創出すること」に鑑みて，タイムライン展は情報公開やイベントを積極的に実施してきた。シンポジウムは 5 月と 6 月の 2 回にわたって開催された。1 回目は本展参加作家たちに加えて金井直准教授（信州大学），武田宙也准教授（京都大学）を招聘し，本展の作品制作の過程を辿りながら作家の声や語りを聴取した。2 回目は，小池一子氏（十和田市現代美術館），住友文彦教授（アーツ前橋／東京藝術大学），牧口千夏氏（京都国立近代美術館），岡田温司教授（京都大学），田口かおり（東海大学） が登壇し，現代美術の展示，収蔵，保存，修復，アーカイヴなどに関する諸問題やケーススタディを中心に議論を行った（図 4）。上記シンポジウムでも指摘があったように，本展の革新性は，展覧会出展作品のみならず展覧会の立ち上げからの記録をも図録やオンライン上で公開し，情報をアップデートしつつ保存していく「随時更新される展覧会の記述」方法にも見出される。展覧会ウェブサイト上では，搬入出の映像記録，作品のハンドリング・マニュアル，光学調査，インタビューなどが公開されつつある。未来のいずれかの時点で，これら情報ソースをよすがに現代美術の生をめぐる議論が多方向へと膨らむのであれば，「タイムライン展のタイムライン」は，作品を構成する素材と同様，多様な形をとりながら伸び広がり続けるだろう。



図4　シンポジウムの様子

なお，本展覧会は，花王文化財団，朝日新聞文化財団の助成を受けて開催され，豊田市美術館，イダショウイチスタジオ，株式会社堀場製作所，株式会社ニコンインステックなど，数多くの機関により多大なるご協力をいただいた。お力添えいただいた方々全てのお名前をここで挙げることは叶わないが，改めて，関係各所に深く御礼を申し上げる。

（企画展実行委員／東海大学創造科学技術研究機構 講師
田口かおり）

新館長からのご挨拶



京都大学総合博物館は 1997 年に設置されました。私は設置された年に総合人間学部から助教授として異動しましたので，総合博物館に 20 年以上も在職することになります。この 4 月からは館長を務めることになりました。

1996 年，学術審議会の中間報告「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について―学術標本の収集，保存・活用体制のあり方について」が出されました。この報告では，大学等における学術研究活動により収集された学術標本を整理・保存，展示・公開するとともに，これら学術標本を対象に組織的に独自の研究・教育を行い，さらに「社会に開かれた大学」の窓口として展示や講演会等を通じて人々の様々な学習ニーズにこたえることができる施設として，ユニバーシティ・ミュージアムの設置が提言されています。この提言にもとづいたユニバーシティ・ミュージアムとして京都大学総合博物館は設置されたのです。設置にあたり総合博物館に移管された旧文学部博物館（現在の総合博物館本館）に加え，幸いにも自然史資料の収蔵室と広い展示空間をもつ南棟の建設が認められ，2000 年に竣工，2001 年には学内の学術資料を移して，展示公開が始まりました。

設置以来，総合博物館の歩みは，先例のない大学博物館のあり方を模索する歴史であったといえます。一つは多様な学術標本の一括管理です。大学の学術標本は，もともと研究室や学部のような専門分野がそれぞれの教育・研究目的のために収集したものです。総合博物館にはこのような異分野の学術標本を一括管理することで，分野を超えた利活用とそれにもとづく研究の創成が期待されています。これまでに何度か行った大学博物館に関する国際シンポジウムでの議論により，日本における総合的な大学博物館のあり方がかなりユニークなものであり，海外からも注目されていることがわかってきました。

もう一つは社会に開かれた大学の窓としての役割です。まず，年に数回行われる企画展・特別展を通じて，収蔵する学術標本とそれにもとづく研究成果や，京都大学で行われている研究活動を紹介しています。子ども向けのイベントにも早くから取組み，大学生・大学院生をチューターとする対話型の「子ども博物館」を毎週土曜日に開催していますが，この活動はもう 15 年も継続して行われています。その他にも京都府や京都市の教育委員会等と協力して，中等教育も念頭においた事業を行っています。

これまでそれぞれの教員が試行錯誤で行ってきた総合博物館の活動は，前任の岩﨑館長のもとで整理され，館の活動としてきちんと位置づけられることになりました。組織的にも，従来の研究部だけでなく，学術資料の管理・運用を担う資料部，展示などの情報発信を担う企画部が置かれ，総合博物館のミッションに対応した改変を行い，年報や収蔵資料目録の充実により，総合博物館の活動全体をわかりやすく発信するように努めています。

昨年度は，総合博物館の将来構想を考える機会がありました。大きな目標は二つ。一つは標本資料に基づく研究の世界的な拠点として総合博物館を発展させること。もう一つは大学と社会とをつなぐ結節点として，さまざまな方向に向けた学術情報発信基地として機能させることです。しかし，人員と運営費の削減は，いずこも同じとはいいながら頭の痛い問題です。専門的な標本資料の管理，分野を超えた資料の利活用と学術交流，そしてさまざまな情報発信にはどうしてもある程度の規模が必要なのです。

京都大学は，我が国で 2 番目に設置された帝国大学として長い歴史をもち，文化史・自然史・技術史のそれぞれの分野で充実した学術資料を蓄積しています。総合博物館は，それぞれの標本資料のために設計された収蔵室と，多彩な展示を行える展示室を備えており，日本の大学博物館の中では恵まれた状況にあるといえます。しかし，収蔵環境や展示空間についてもそろそろ改修を考えるべき時期が来ています。施設の更新にも気を配りつつ，将来構想に沿って総合博物館を発展させていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

（京都大学総合博物館長　永益英敏）

2019 年「青空子ども博物館 in 円山」の開催

2019 年 5 月 6 日（月）に「青空子ども博物館 in 円山」（京都大学総合博物館・円山公園音楽堂事務局共催）が開催されました。毎週土曜日に京都大学総合博物館のロビーで行われている「子ども博物館」の拡大版で，京都市東山区円山公園音楽堂の青空のもと，第 12 回目の開催となりました。今回は「子ども博物館」スタッフ 8 名によるプログラムが行われ，なかには化石の掘り出し体験など普段博物館ではできないプログラムもあり，子供たちには笑顔があふれていました。最後には，皆で飛距離を競う恒例の「紙ヒコーキ大会」も行われました。大会の上位 3 名には表彰に加えて，開催にご協力いただいたミュージアムショップ ミュゼップから副賞が贈られました。



化石掘り体験の様子

（総合博物館 助教　白勢洋平）

「出張子ども博物館 in 台湾」を終えて

今回私は通常の子ども博物館の活動の出張版として台湾で行われたイベント，出張子ども博物館 in 台湾において「多面体を作ろう」というブースを担当した。これは何をするブースかというと，菱形十二面体というあまり聞きなれない多面体を紙を使ってのりを使わずに工作しようというものである。出来上がりがなかなかきれいなものになるため，日本での子ども博物館の活動においても人気のあるブースであると自負している。

台湾での実施にあたり，私には不安を感じる要素が多少存在していた。まず多面体の作製の難度が高いということである。加えて今回の相手は台湾の小学生であるため日本語が通じない。いくら現地スタッフがいるとはいえ，前述の通り多面体を作るのは難しくおそらく現地スタッフでも完全なサポートは無理なのではないかと思っていた。

実施当日，残念ながら午前の部では懸念通りあまりうまく進行することができなかった。それに対し午後の部はスタッフの数を増やしてもらい，私自身も多面体作製の説明に道具を加えるなど改善を加えたことにより，比較的スムーズに進行することができた。

このように私自身の見通しの甘さなどから午前の部はあまり良い出来とは言えなかったが，午後の部はその失敗を受け改善できる点を改善しうまく進行できたと思う。また今回は私にとっての初めての海外渡航であったが，台湾の小学生相手にブースを行うことで言語の壁はあれど日本の小学生とさほど違いがないと感じることができた。これらの経験を活かし，もしまた海外での出張博物館があれば今度はうまく実施できると確信している。

（理学研究科 博士後期課程　大西智也）



作製する多面体の説明



多面体の作製補助の様子

洛北高等学校・附属中学校との連携事業について

2017（平成 29）年 2 月 27 日（月）に，京都府立洛北高等学校及び京都府立洛北高等学校附属中学校と京都大学総合博物館との教育・研究協力に関する基本協定書調印式を行った。ここで結ばれた協定の有効年は 5 年であり，折り返し地点となったので，ここでこれまでの連携事業についての経過をまとめる。協定締結以前にも，京都ＳＫＹシニア大学における京都大学総合博物館と京都府立洛北高等学校附属中学校の共催による講座の開催や，京都府立洛北高等学校附属中学校講座としての「観察力を鍛えるカガクノミカタ」の開催など連携は深められてきた。協定の締結に伴い，教職員間での意見交換会や，連携事業においては両校担当の教員同士が互いに意見を出し合い，新たな連携のかたちを創りあげてきた。以下に，これまでの年度ごとの連携事業について報告する。



調印式

2017（平成 29）年度
京都府立洛北高等学校附属中学校連携事業（中学 1 年）
「総合博物館での特別講義と見学（博物館で学ぶ）」
担当者：白勢洋平（総合博物館 助教）・中山直英（総合博物館 特定助教）
京都府立洛北高等学校附属中学校連携事業（中学 2 年）
「総合博物館での博物館の役割等についてのグループディスカッション（博物館で識る）」
担当者：塩瀬隆之（総合博物館 准教授）
京都府立洛北高等学校附属中学校連携事業（中学 3 年）
「洛北中学での特別講義」「総合博物館での座談会」
担当者：永益英敏（総合博物館 教授）
京都府立洛北高等学校ＳＳＨ事業（サイエンスⅡアドバンスセミナー等）に係る講師派遣
担当者：白勢洋平（総合博物館 助教）



中学2年生来館



中学 1 年生来館

2018（平成 30）年度
意見交換会
参加者：京都府立洛北高等学校及び京都府立洛北高等学校附属中学校と京都大学総合博物館の教職員
京都府立洛北高等学校附属中学校連携事業（中学 1 年）
「総合博物館での特別講義と見学（博物館で学ぶ）」
担当者：永益英敏（総合博物館 教授）・佐藤崇（総合博物館 研究員）
京都府立洛北高等学校附属中学校連携事業（中学 2 年）
「総合博物館での博物館の役割等についてのグループディスカッション（博物館を識る）」
担当者：白勢洋平（総合博物館 助教）
京都府立洛北高等学校附属中学校連携事業（中学 3 年）
「洛北中学での特別講義」「総合博物館での座談会」
担当者：本川雅治（総合博物館 教授）
京都府立洛北高等学校ＳＳＨ事業（サイエンスⅡアドバンスセミナー等）に係る講師派遣
担当者：白勢洋平（総合博物館 助教）

（総合博物館 助教　白勢洋平）

招へい研究員の紹介
LE Duc Minh 客員准教授

ベトナム国家大学ハノイ大学環境科学部准教授　招へい期間：2019年4月1日（月）～6月30日（日）

Vietnam is located in a complex region in the world in terms of its geological history, past climate change, rugged terrain, and torrent rivers. The combination of the factors has generated very rich and unique fauna and flora in the country. However, although general pattern of species distribution in the country has been slowly unraveled in recent years, many puzzles remain. For example, the role of Red River, the largest river, in northern Vietnam in shaping biogeographic pattern of different vertebrate groups has not been well understood. Some are clearly separated by the river, but others seem to cross the river more easily. Similarly, other mountain ranges, valleys, and rivers in northern Vietnam show various degree of influence on species distribution, but the mechanism, interaction between different environmental and physical factors, and temporal and spatial scales determining biogeography of the vertebrate fauna have not been comprehensively studied.

In collaboration with other colleagues in Vietnam and abroad, I have a privilege to work with different vertebrate groups, including amphibians, reptiles, and mammals, in the country. The data we have accumulated over the years can now be used to shed light on zoogeography of northern Vietnam. Nonetheless, before untangling the difficult questions, phylogenetic relationships, systematics, and even alpha taxonomy of some groups with limited knowledge in some cases need to be analyzed in more detail. It's my great honor and pleasure to be invited by Prof. Masaharu Motokawa to visit KUM to conduct such research. The visit was fitting perfectly to my research interest and it also came at an excellent time, when idea exchange is critically needed to find a way forward in addressing difficult questions of how biodiversity patterns in Vietnam are shaped and formed.

During my visit, I had a chance to meet with other colleagues at Hokkaido University, Prof. Hitoshi Suzuki and Asst. Prof. Satoshi Ohdachi, and Obihiro University, Prof. Tatsuo Oshida and the University of Tokyo, Asst. Prof. Dai Fukui. In Hokkaido, I delivered a presentation on application of molecular approaches to biodiversity research in Vietnam at the First Yaponesia Sapporo International Meeting. The meeting was a wonderful platform to share data and exchange information on patterns of phylogeography among different mammal groups in Asia, especially those from Vietnam and Japan. I learned a great deal from the research conducted in Japan and methods used in resolving complicated phylogeographic problems. In Obihiro, I gave a similar presentation and received many helpful comments from the audience, in particular from Prof. Tatsuo Oshida, who has been working in Vietnam for many years. The suggestions help me to advance my hypotheses on zoogeography of northern Vietnam. In Kyoto, I was also able to discuss my research with Assoc. Prof. Akio Shinohara of Miyazaki University, who specializes in molecular phylogeny of moles. His deep insight into this and other groups of mammals in Asia, specifically in terms of their zoogeography, phylogeny, and systematics, enlightened my knowledge and gave me some way forward to resolve the problems at hand.

As an important part of my research is based on specimens housed in museum collections, the visit was particularly helpful to me in this aspect. Prof. Motokawa kindly showed me the collections at KUM, which is one of the best and oldest university museums in Japan. He also took me to the university museums at Hokkaido University and University of Tokyo, and the National Museum of Nature and Science in Tsukuba. At the National Museum, Dr. Shin-ichiro Kawada, who is a curator of mammals and has long been performing research in Vietnam, gave us a behind-the-scene tour of the world-class collection. We also discussed at length with him about systematics and biogeography of different mammals in Vietnam.



国立科学博物館収蔵室の視察

Back in Kyoto, I worked to compile a comprehensive data set of distribution for amphibians, reptiles, and mammals in northern Vietnam for further analyses. Once completed, the study is expected to fill in gaps and provide insights into biogeographic history of amphibians, mammals, and reptiles in the region. In addition, we also performed molecular phylogenetic analyses for Southeast Asian moles of the genus *Euroscaptor* using both mitochondrial and nuclear genes. The species in the group show a very interesting biogeographic pattern, but recent studies have been unable to resolve outstanding problems. This partly results from limited taxonomic knowledge of poorly surveyed populations in northern Vietnam. By using both morphological and molecular approaches, the new study will make a significant contribution to addressing phylogenetic relationships and zoogeography of the fossorial moles in the region. In between the research time, I also presented our work on saving critically endangered species in Vietnam to KUM.

In the end, my visit to KUM was a great success. I was able to learn so much from colleagues in Japan and deepen my knowledge in phylogeny, systematics, and zoogeography through constructive exchange and interactions throughout the trip. My research has greatly benefited from such excellent experience. Moving toward the future, I look forward to continuing the research collaboration with Prof. Motokawa and his team as well as other colleagues in Japan in systematic and zoogeographic studies of different vertebrate groups in Vietnam and neighboring countries. I very much hope that in the future cooperation between Hanoi University of Science and KUM will be further strengthened. I would also like to take this opportunity to thank all colleagues at the museum for their hospitality, inspiring discussions, and friendship.

(LE Duc Minh)

総合博物館コレクション研究〈6〉

海角遺珠　記憶拼図
（遠く忘れられた文化財 記憶のパズル）

今年３月の末，京都大学総合博物館収蔵資料目録第６号『台湾民俗資料』の刊行がなった。

総合博物館が収蔵する台湾民俗資料は，戦前に文学部が収集したコレクションを継承したもので，長い間，本格的な調査がなされることはなかった。そこに新しい光を当ててくださったのは，国立成功大学博物館の郭美芳先生である。

成功大学博物館と総合博物館との交流は，2013 年に始まり，2015 年には郭先生を客員准教授に迎えた。3 ヶ月間の滞在期間中，郭先生は収蔵庫に眠る資料を一つ一つ丹念に調査され，その特色や意義を明らかにされた。2017 年にも再度来日され，追加調査を実施された。

本稿は，成功大学博物館と京都大学総合博物館の学術交流の大きな成果として，目録が刊行できたことを記念し，郭先生にご寄稿いただいたものである。

京都大学総合博物館の文化史部門で収蔵する台湾関連資料は，質量ともに世界的によく知られたコレクションとはいえないにしても，また専門の博物館に匹敵する内容を備えたものでもなく，ことさらに美しい資料群というわけではないとしても，80 ～ 90 年，更には 100 年に渡り，日本の文化財とともに収蔵庫に保管されてきた。そして今年，目録の出版によって資料を公開することができた。これはさながら，日本統治時代の台湾の文化財に欠かせない重要な歴史パズルのピースをひとつ埋めたことになる。私たちが研究を進めて資料の特性を調べ，収集の目的を探り，今日にわたって収蔵されてきたことの価値を知る，そうした研究には大きな意義があると考える。

筆者は，2016 年の総合博物館ニュースレター第 36 号に「Looking at Historical Objects, Thinking about rising of University and its Museum」という一文を書き，地理学の収蔵庫に保管される大形のポジ・ネガのガラス乾板約 2500 件について簡単に述べた。その写真は野外調査風景・図書に載る民族の複写・都市・産業など，景観・収蔵品の記録写真を含み，また，記録だけではなく，京都大学の 20 世紀前半の教育研究と野外調査の状況を明らかにしている。例えば，台湾先住民と三高生徒・震災後の家屋被害・新式鉄橋・特殊な地質景観・伝統産業（例えば枋寮網漁）・宗教信仰（北港芸閣）・新興巨大紡績場など，さまざまな分野にわたり，大学が世界につながる学習と国際観のある研究，そして，新しい科学技術と伝統文化の双方について教育するビジョンをもっていたことを垣間見ることができる。20 世紀前半にこの国がこれほど勢いをもっていた理由は想像に難くない。



図１　左：カミヤツデの茎
右：島津製作所によって製作されたタイヤル族の標本模型

大形のガラス乾板は，学習範囲の広さを示すとともに，収蔵資料は文化理解の方法や緻密かつ詳細な探究をも表している。こうした資料は当時の教材とみなすことができ，コレクションのもつ価値や意義についてさまざまに解釈できる。例えば，「カミヤツデの茎」（図 1 左）は台湾でよく見られる農作物で，1903 年に勧業博覧会に出品するために日本へ持ち込まれ，その後 1925 年にパリ工業博覧会に出展し，無繊維の紙であるということで賞を獲得した。それは，国家産業の研究開発を向上させ，新興の大国に割り込み国家の栄光を象徴するなど，多くの価値をアピールし，当時の学校教育が世界から学ぼうとする開放的な姿勢と，研究開発の成果を重視する戦略を表している。

タイヤル族（図 1 右）と漢族の人形は，台湾で収集された資料ではないが，今回の目録に掲載している。製作者の島津製作所は，ドイツの教育模型・器具製作会社に学び，全国（植民地を含む）の教材製作の重鎮へと発展した。この人形は，当時の学校では世界の様々な民族について学習教材を用いて探究されたことを表し，更に，その民族の文化なども学ぶことで「彼を知り己を知れば，百戦殆うからず」という考え方があったことを反映している。台湾は植民地のひとつであり，長期的な統治の観

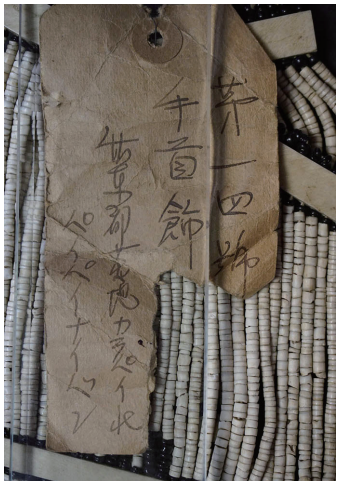


図2　竹東郡から来たと考えられるタイヤル勇士の
貝製ビーズ足飾りと採集当時の蕃物交易所の販売タグ



図3　サイシャット族の花嫁の頭飾り

点から，次世代に深く理解させることが必要であった。

しかし，台湾の文化財はどのような経路で日本へ到達したのだろうか。一部の資料には当時の購入状況を示すタグがついており，価格や場所などの情報を示し，資料の出所を探すことができる。 そのうち手書きのタグ数点は，タイヤル族の地区とおぼしき場所の蕃物交易所から来ていることを示し，その資料はほとんどが貝や貝製装飾品である(図 2)。初期は手書きのラベルであったが，やがて印刷されたラベルも現れ，「台湾生蕃屋商店」の設立も窺える。大規模な商業生産の販売モデルへの発展をたどることができ，また，取引所と観光の普及・促進とのつながりをも示している。

これらを収集し，寄贈したのは誰だろうか。いったい誰が海外の資料に興味をもったのだろうか，観光者や旅行者だろうか。調査研究に訪れた学者や教授たちが台湾調査の後に旅行したのだろうか。京都大学の教授であった山本一清が創設した山本天文台には，台湾の様々な観光記念品が収集されていた。教授と学生たちは大正 15 年以降に，阿里山（および小笠原天文台）で天文観測を行い，その後に手工芸品や台湾を紹介する各種印刷物を持ち帰ったのだろう。その中で最も貴重なものは「ブヌン族の木彫の暦」で，現在の台湾でも 10 点に満たない数しか残っていない。

また，台湾で収集された資料のうち一部は，特徴からして台湾の部族のものではない。クリスナイフ，木製の匙，パイプなどは東南アジアのもののようである。台湾の海洋民族，あるいは南島語族の特性からみれば，記録の誤りではなく交易の結果の可能性がある。

この他，2015 年の調査では，時間が足りずに台湾でもきわめて貴重な資料の記録ができなかった。それは平たく大きな資料で，巻いた状態で日本史の収蔵庫に保管されていた。2017 年 7 月の追加調査の際に，その資料が珍しく貴重なサイシャット族の花嫁の頭飾り（図 3）であることがわかった。これまでは新式の簡略化されたものしか見たことがなかったので，非常に驚いた。頭飾りは綿，毛，麻，貝の珠，銅の鈴など種類の異なる材料で構成され，竹の枠で支えた柔軟な骨組みをもち，保存や維持が難しい。将来，クリーニングと修復を経て公開され，サイシャット族の工芸技術を示す重要な資料となることを願っている。

調査期間中，考古学の収蔵庫でも，蘭嶼ヤミ族（タオ族）の椰子殻の匙などのコレクションを調査した。これらの資料は今回の目録に掲載できず残念である。また，調査後半では，対象資料の計測や着色の記録と併せ，収蔵資料のデータベースの作成を試みた。しかし，時間的な制約から僅かに下書きを果たしたのみで，完全なデータベースの作成には至らなかったことも今後の課題といえる。

京都大学総合博物館へ調査に行けたことは，人生でも思いがけず光栄なことであった。2013 年，大野照文館長（当時）と成功大学博物館との間で提携の覚書が交わされたが，これは成功大学にとって非常に重要な意義をもち，大きな進歩と転機であった。京都大学は成功大学が敬慕する模範的な学校であったが，両校はとくに協力事業を行う機会もなく今日で 7 年が過ぎてしまった。それにもかかわらず，非常に友好的な研究環境と，博物館や収蔵庫に自由に出入りできるという信頼を提供してくれた京都大学総合博物館の諸氏に改めて感謝します。

（国立成功大学博物館　副研究員兼展示組組長　郭美芳）
（訳：京都大学文学研究科　博士後期課程　馬渕一輝）

研究資源アーカイブ通信〈16〉

アーカイブズの整理技法に関するノート①
――容器リストと索引

「研究資源」としての建築図面

京都大学研究資源アーカイブでは，1950 年代から 70 年代にかけて建築学専攻で教鞭を執った建築家の増田友也（ますだともや，1914–1981）が残した資料を対象に，アーカイブズ学に依拠しながら整理を進めている。

この資料の大半は建築図面で，京都大学の吉田キャンパスの校舎や体育館，あるいは鳴門市の公共建築等に代表される，増田友也のほぼすべての設計活動の記録と考えられる。数量は，原図 203 箱と青焼図面 328 冊。大量の図面群を，どう整理して，どんな目録をつくるかは，本事業の主要な課題であり，資料の性質を鑑みた判断が求められるため，アーキビストの腕の見せ所となる。

ここでは 2 回に分けて，整理の考え方と，実践のプロセスとを紹介する。

アーカイブズ学に基づく整理技法の有効性

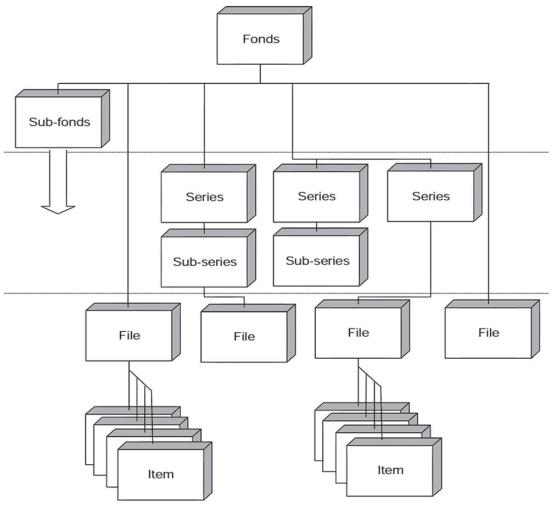
組織や個人がつくり出した記録を対象とした，アーカイブズ学に基づく整理法がある。なかには，建築分野のアーカイブズに向けて考えられた技法もあって，その整理法を用いることにより，たとえ建築物が取り壊されても，記録を残すことで，アーカイブズらしいやり方で後世に設計者の活動を伝えることが可能となる。

こうした技法の有効性は，記録が作成された時代により異なる。つまり，当時の建築家や建築図面がはたした役割と，その役割をまっとうするために必要な記録量とで，適用を判断する必要がある。附属図書館の京都大学貴重資料デジタルアーカイブで公開されているジョサイア・コンドル建築図面（建築学専攻所蔵）は，全 468 点で，増田友也の資料群に比べて多くはない[*1]。そのため，一点毎にタイトル等を記述したリストが作成されており，多くの場合はこれで用が足りると考えられる。その素朴なリストは，単純でわかりやすいと，積極的に評価してもよい。

建築分野のアーカイブズに国際的な注目が集まりはじめたころ，ユネスコが 1986 年に発行した調査報告書で[*2]，一点別の詳細な記述法は批判の対象とされた。コンドル（1852–1920）が活躍した時代とは異なり，こうしたアプローチは「ユートピア・ビジョン」と表現されて[*3]，ル・コルビュジエ（1887–1965）のアーカイブズのように潤沢な予算がなければ実現できないと評された。その代替案として 20 世紀後半に有効性が主張されたのが，資料を群として扱うアーカイブズ学の考え方であった。

その考え方は，いまでは国際アーカイブズ評議会（International Council on Archives, ICA）による記述標準 ISAD(G) において視覚化されている[*4]。ISAD(G) では，「多階層記述 Multilevel Description」に基づいて，フォンド，シリーズ，ファイル，アイテムの階層別に資料群をとらえる。また，「フォンド編成レベルのモデル」が，全資料体に構造を与える[*5]。そのモデルを視覚化した図がアーカイブズの整理の考え方をわかりやすく描写していることもあり［図 1］，この記述と編成のコンセプトは，アーキビストのあいだで国際的に共有されている。

図 1：フォンド編成レベルのモデル



プロジェクト――建築家の活動単位として

建築分野のアーカイブズについて語られるなかで，建築の設計者も資料の利用者も，「プロジェクト」の名称を手がかりとして，資料を探し当てるといわれる[*6]。

プロジェクトとは，建築実務だけでなく，設計コンペ，あるいは展示や出版等を指し，実現の如何を問わず，建築家の活動の構成単位となる。だからといって，プロジェクトで資料群を整理すればいいのかといえば，必ずしもそうではない。これまで，北米で図書館学をベースに図面一点別の整理法を検討するなかでプロジェクトによる区分を用いたり[*7]，日本の研究でプロジェクト単位で整理したりしているが[*8]，いずれからも万能ではないことがわかる。とりわけ，プロジェクト名が不明の資料があ

ると分類不可となるため，その数が多ければ，プロジェクト名から資料を検索するという整理の本来の狙いが達成されないことになる。

プロジェクト単位の分類が有効なのは，設計事務所での記録の配列状態（アーカイブズ学の用語で「原秩序 Original Order」）がプロジェクト単位で一貫している場合に限る。今回の増田友也のケースは原秩序が不明であったため，プロジェクト単位を優先する整理方針の採用には慎重な判断が求められた。結果として，プロジェクト名不明の資料が数多くあったし，プロジェクトとの関連が不明瞭なことが多い個人文書が含まれていたため，プロジェクト単位での一次的な分類は見送ることにした。

容器リストとプロジェクト索引

建築生産にともない作成される記録は，図面，事務文書，写真と，大きさが不定形である。加えて，紙だけでなくフィルムや複写物を含み，媒体の性質もさまざまである。そのため，大きさや媒体特性にあわせて，物的には資料タイプ別に管理されることが多い。設計者を含む作成元の組織内で，同一プロジェクトの所在場所は，記録のタイプが異なっても共有されているかもしれないが，第三者も使える検索ツールでプロジェクト名を検索の入口とするには，それなりの工夫を要する。

アーカイブズ学では，いまのところ，「二つの異なる要素を作成する」ことで応じている[*9]。つまり，全資料を網羅する「容器リスト Container List」と同一プロジェクトの資料だけをまとめる「プロジェクト索引 Project Index」とを，目録内に用意する考え方である。

記述項目は，容器リストが「箱／フォルダ番号 Box and Folder Numbers」「タイトル Folder Title」「作成日 Dates of the Records」[*10]，プロジェクト索引が「建築主／プロジェクト名 Client Name/Project Name」「所在地 Location and State」「竣工年や設計期間 Date」「プロジェクト種別 Project Type」「共同者とその役割 Collaborator/Role」「配置場所 Physical Location of Materials」「複製物の所在 Microfilm」となる[*11]。このうち，前者の「箱／フォルダ番号」と後者の「配置場所」とで，双方が紐付けられる。各々の役割は，書籍における目次と索引との関係のようなもので，全体の内容を網羅的にページ順に紹介する目次が容器リスト，巻末で主題毎に関係するページをまとめる索引がプロジェクト索引にあたる。

他分野への応用可能性

容器リストと索引とを目録に含めることは，とりたてて新規性のあるアイデアではないし，建築分野に特有でもない。米国アーキビスト協会が発行する，アーカイブズ学の目録──検索手段（Finding Aids）──について解説した基礎的なシリーズでも，目録の構成要素に挙げている[*12]。そこでは，容器リストと索引とを，検索手段の主要なタイプであるインベントリー──シリーズ・レベルのリスト──の要素に位置づけている［表 1］[*13]。また，索引を必要とする典型的な分野を例示していることからは，索引は建築分野に限った検索ツールではないし，検索手段の必須要素でもないことを知れる[*14]。

建築分野でプロジェクト索引を作成する場合，すでに項目を列挙したように，プロジェクトに関する情報を，資料そのものの情報とは別に記述することがある。この記述の考え方は，「ダブル階層記述 Double-level Description」と呼ばれる（本稿は次回に続く）[*15]。

（総合博物館 特定助教　齋藤 歩）

1：タイトル Title page	
2：履歴 Administrative or biographical history	
3：記録について（内容と物的特性）Description of the records	
4：利用方法 Administrative information	
5：容器リスト Container/folder lists	
6：追加の情報（略歴など）Additional information	
7：索引 Indexes	名称（人、組織、場所）Personal, organizational or place name
	イベント Events
	レコード・タイプ Major types of records
	主題 Major subjects

表 1：インベントリーの構成要素

＊1：工学研究科建築系図書室（吉田）所蔵 重要文化財「ジョサイア・コンドル建築図面」, 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ . URL: https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/collection/dep-arch-conder;「ジョサイア・コンドル建築図面リスト」, URL: hdl.handle.net/2433/225096

＊2：Françoise Hildesheimer, *The Processing of Architects' Records: A Case-study, France*, UNESCO, 1986（英語版 1987）.

＊3：*Ibid*., p. 29.

＊4：*ISAD(G): General International Standard Archival Description, 2nd Edition*, International Council on Archives, 2000.

＊5：*Ibid*., p. 36. 日本語訳は以下を参照した。『記録史料記述の国際標準』, アーカイブズ・インフォメーション研究会編訳 , 2001, 54 頁。

＊6：Waverly Lowell and Tawny Ryan Nelb, *Architectural Records: Managing Design and Construction Records*, Society of American Archivists, 2006, p. 100.

＊7：*Cataloging Architectural Drawings: A Guide to the Fields of the RLIN Visual Materials (VIM) Format as Applied to the Cataloging Practices of the Avery Architectural and Fine Arts Library, Columbia University, Developed for Project AVIADOR*, Art Libraries Society of North America, 1992.

＊8：鴨下武＋山名善之「『鬼頭梓資料』の一次整理とその考察（その 1）」,『日本建築学会大会学術講演』, 2004, 517–518 頁，および同（その 3）までの一連の資料整理の試み。

＊9：Kelcy Shepherd and Waverly Lowell, *Standard Series for Architecture and Landscape Design Records: A Tool for the Arrangement and Description of Archival Collections*, Environmental Design Archives, University of California, Berkeley, 2000, p. 11.

＊10：*Ibid.*

＊11："Guide to the Project Index", Environmental Design Archives, University of California, Berkeley, URL: https://archives.ced.berkeley.edu/guide-to-the-project-index

＊12：Kathleen D. Roe, *Arranging and Describing Archives and Manuscripts (Archival Fundamentals Series II)*, Society of American Archivists, 2005.

＊13：*Ibid*., p. 87.

＊14：*Ibid*., p. 91. 例示されている分野は，文学，写真，地図，系譜学。

＊15：*A Guide to the Archival Care of Architectural Records 19th–20th Centuries*, International Council on Archives, 2000, pp. 82–84（邦訳『建築記録アーカイブズ管理入門』, 安澤秀一訳 , 書肆ノワール , 美学出版 , 2006, 115–117 頁）. ただし，本稿の引用部分の日本語訳は筆者による。

総合博物館日誌（2019 年 3 月～ 6 月）

＜展示＞

★ 2018 年度特別展

「カメラが写した 80 年前の中国―京都大学人文科学研究所所蔵 華北交通写真―」

2019 年 2 月 13 日（水）～ 4 月 14 日（日）

関連イベント

・「カメラが写した 80 年前の中国」展をふりかえって／ 4 月 13 日（土）

貴志俊彦（京都大学東南アジア地域研究研究所）

石川禎浩，菊地暁，向井佑介（京都大学人文科学研究所）

白山眞理（一般財団法人日本カメラ財団）

★平成 30 年度特別展 文化財発掘Ⅴ

「発掘 乾山窯」

2019 年 2 月 20 日（水）～ 4 月 21 日（日）

関連講演会

第 1 回／ 3 月 9 日（土）「考古資料と美術作品―『発掘　乾山窯』を企画して―」

千葉豊（京都大学文化財総合研究センター）

「尾形乾山―生涯とその芸術―」

西川秀敏（法蔵禅寺／禅文化研究所）

第 2 回／ 3 月 16 日（土）「乾山焼の成形技術と意匠」

鄭銀珍（大阪市立東洋陶磁美術館）

第 3 回／ 3 月 23 日（土）「乾山窯と京焼窯―民俗考古学からみた御室・鳴滝・五条坂―」

木立雅朗（立命館大学文学部）

第 4 回／ 4 月 6 日（土）「乾山研究 50 年」

リチャード・ウィルソン（国際基督教大学教養学部）

★ 2019 年度企画展「タイムライン：時間に触れるためのいくつかの方法」

2019 年 4 月 24 日（水）～ 6 月 23 日（日）

関連イベント

・シンポジウム Vol. 1「タイムライン展解題―制作・展示・作家からの声を中心に」／ 5 月 12 日（日）

大野綾子，加藤巧，ミルク倉庫＋ココナッツ（作家），土方大（作家／インストーラー）

金井直（信州大学），武田宙也（京都大学）

コメント：岡田温司（京都大学／タイムライン展実行委員長）

司会：田口かおり（東海大学）

・シンポジウム Vol. 2「タイムライン展をふりかえる」／ 6 月 8 日（土）

「実験と体験 1983-2000 Sagacho Exhibition Space」

池田和子（十和田市現代美術館／クリエイティブディレクター）

「生産者たちの時間」

住友文彦（アーツ前橋／東京藝術大学大学院）

「『タイムライン』展の時間軸：現在進行形の保存、記録の更新、予防的修復」

田口かおり（東海大学創造科学技術研究機構／修復士／タイムライン展実行委員）

「学芸員の領分」

牧口千夏（京都国立近代美術館）

司会：岡田温司（京都大学／タイムライン展実行委員長）

★ ロビー展示

●「ないをたのしむ」展（SUKI るプロジェクトとの共催）

2019 年 3 月 13 日（水）～ 3 月 24 日（日）

関連イベント

・ワークショップ「きく、さわる、つくる」／ 3 月 17 日（日）

富田直秀（京都大学大学院工学研究科）

桑田知明（京都市立芸術大学）

広瀬浩二郎（国立民族学博物館）

＜イベント＞

●青空子ども博物館 in 円山（円山公園音楽堂）

2019 年 5 月 6 日（月）

●京都千年天文街道

第 36 回アストロトーク／ 3 月 30 日（土）

「小惑星が落ちてくる！」作花一志　（京都情報大学院大学）

「3D メガネでみる宇宙のすがた～木星や土星と衛星のお話～」青木成一郎（京都大学天文台天文普及プロジェクト室／京都情報大学院大学）

＜レクチャーシリーズ＞

●森の未来は菌だけが知っている―森はどのように成り立ち、変化していくのか―」／ 4 月 13 日（土）

門脇浩明（学際融合教育研究推進センター／フィールド科学教育研究センター）

聞き手：永益英敏（京都大学総合博物館）

●正直さと不正直さの脳のメカニズム／ 5 月 11 日（土）

阿部修士（こころの未来研究センター）

聞き手：中川千種（京都大学総合博物館）

＜博物館セミナー＞

●第 100 回記念特別編「出張子ども博物館 in 台湾」開催報告／ 3 月 8 日（金）

安齋綾，古居晴菜，牧野智久（京都大学大学院理学研究科）

●東南アジア熱帯林の植物相研究／ 4 月 12 日（金）

永益英敏（京都大学総合博物館）

●ヒトの二足歩行の起源はなにか。マクロ形態の発生から考える／ 5 月 10 日（金）

森本直記（京都大学大学院理学研究科）

● Biodiversity Conservation in Vietnam: Challenges in the 21st Century ／ 6 月 14 日（金）

Minh Le（Faculty of Environmental Sciences & Central Institute for Natural Resources and Environmental Studies (CRES) & Faculty of Environmental Sciences Vietnam National University (VNU), Hanoi）

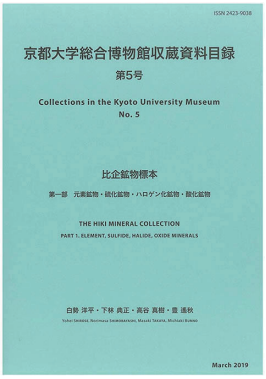
＜入館者数＞

14,109 名（うち特別観覧　51 団体 , 2,975 名）

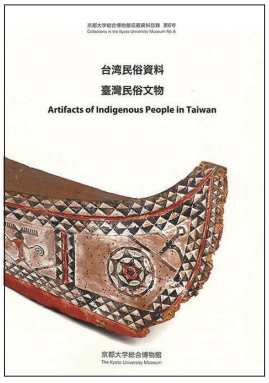
＜博物館の刊行物＞

・京都大学総合博物館収蔵資料目録第 5 号

「比企鉱物標本　第一部　元素鉱物・硫化鉱物・ハロゲン化鉱物・酸化鉱物」



・京都大学総合博物館収蔵資料目録第 6 号「台湾民俗資料」



発行日　2019 年 8 月 10 日

編集・発行　京都大学総合博物館　電話　075-753-3272

〒 606-8501　京都市左京区吉田本町　FAX　075-753-3277

http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/